

改めて「＜子供＞の誕生」を考える

これは、アリエス（1914～1984）の書物である。

彼は、中世ヨーロッパには「子ども」の概念がなかったことを明らかにしようとした。

横道にそれるが、イギリス名誉革命期、ロックは著書「教育に関する考察」で、「子供の飲み物は弱いビールにしなければなりません。しかも、それを認められるのは食事と食事の間ではなくて、パン一切れを食べた後です。」と当時の子育てに言及している。

アリエスは、中世当時、子供期に相当する時期は、「小さな大人」が自分の用を足すに及ばない時期だけで、その後すぐに大人と同じ社会で過ごしていたらしい。

当時の絵画には、今でいう子供が、平気で大人と居酒屋で過ごしているものがある。

この時代にロックは、子供は白紙のような存在であり、家庭教育の大切さを説いた。これは、勉強が子供の仕事であり、家庭を中心に大切に育てられ大人への準備をする、という現代の考え方の基礎を説いたのである。

現代では、子供期の存在と子供期の教育の大切さが理解されている。そのため、子供と大人が受容する（与える）情報の質や量が適切に判断されてきたと思う。

さて、今日はどうか。

かつて、規制緩和により、子供と大人が同じ情報を共有できるというフレーズで携帯電話等が市場に出回った。

そして今日、スマートホンのようなモバイル機器が子供を含め誰もが持つようになってきた。そのことで、子供と大人が持つ情報がほぼ同じような状態になっているのではないだろうか。つい先日までは、携帯電話を使っていたことで、フィルタリング等の手法や持たせないという運動が盛んにおこなわれていた。しかし、タブレットとともに、電話でなく、コンピュータがどこにでもあると、その規制も弱まっている感をぬぐい去れない。いったい、どのような環境が子供たちのまわりにできているのだろうか。

最近、世界でいたたましい事件が起こっている。

その状況をいとも簡単に子供たちが自ら見ている。自分は、（素直に）恐ろしいので見ようという気持ちも生じなかったが、小さな子供たちがそのような状況をそのまま受け入れてしまっていたらどのようなことが起こるのだろうか。

とても不安な気持ちの今日この頃である。

でも、このような環境をつくったのは、いかなる理由があろうと我々大人であることは間違いない。

規制はもうなじまないだろう。このような情報漬けが子供の成長にどのような影響を与えるか分析し、必要な時期に必要な物・量を与えるように大人が考えなければならない。

「子供期」を考える大切な時期に来ているような気がする。